慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	奥井教授をいたむ
Sub Title	In memory of the late Prof. Okui
Author	平井, 新
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1965
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.58, No.11/12 (1965. 12) ,p.1113(11)- 1114(12)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	奥井復太郎博士追悼特集 追悼の辞
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19651201-0011

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三三年　二月　奥井塾長一行訪米旅行記　「三田評論」五七五号
昭和三四年　二月　創立百一年を迎えて　「三田評論」五八一号
三四年一〇月　荷風と東京(1)(2)　「三田評論」五八四、五八五号
三五年　一月　空の旅さまざま　「三色旗」一四二号
三五年　三月　福沢先生生誕百二十九年を迎えて　「三田評論」五八六号
三五年・六月　明治・大正・昭和の私　「三色旗」一四六号
三七年　都市随想　「新都市」一六巻二号一九六二年
三九年　不思議な国民　「国民生活研究」三巻六号
三九年　exact Science 的に　「国民生活研究」三巻七号
三四年　カネと生活感覚　「国民生活研究」三巻八号
三九年　お先走り　「国民生活研究」三巻九号
三九年　茶一杯、葉ッパ一枚　「国民生活研究」三巻一〇号
三九年　祀られた百円札　「国民生活研究」三巻一一号
四〇年　新旧渺茫　「国民生活研究」四巻一号
現代大都市の経済、社会的性格　（宮中ご進講）
大学における教養課程の意義　「塾生案内――慶応義塾大学」一九六三年
（佐藤仁威・村上研二作成）

奥井教授をいたむ

平井新

講義に、講演に、会合にと、連日、精力的に奔馳されて頑健を誇っていられたかに思われた奥井教授の突然の訃報を聞いた時は、正に青天の霹靂、われとわが耳を疑った。学部のことを始め、公私に亘って何かにつけ同教授の御指示を仰いでいた私は、いいようのない深い落胆と自失におとされた。古来老少不定といわれ、人生朝露の如しともいわれているが、同教授の死はこのことを身に泌みて感じさせた。

奥井教授は恵まれた家庭環境の中に成人されたせいか、人となり、柔和、誠実、聡明、明朗、寛大、常に温顔に微笑をたたえて誰とも気軽に語るという庶民的な方であった。塾長になられてからも、少しも辺幅を飾らず、極めて質実、広く学生などとも忙中にかかわらず親しく気軽に語るという風であった。

奥井教授は学界、教育界に幾多の大なる足跡を残された。

イギリスの十九世紀初期の芸術的社会主義者ジョン・ラスキンの研究に発足されて、都市経済学の研究に終世努力され、その間大小幾多の論作をものされたが、斯学の開拓者先駆者として名は永久に忘れられないものであろう。

奥井教授はまた勝れた教育家であった。その卓抜な識見は、特に本塾塾長となられてから遺憾なく発揮された。まず特筆すべきことは、本塾百年祭とその記念事業を大成功裡に遂行されたことであろう。日吉記念館、日吉第四校舎、三田南及び西校舎などの建設整備によって学園の面目が一新されたことについて、奥井教授の名を忘れることはできないであろう。その間我国政治運動史上、未曽有の安保闘争に当面されたが、よく対処、学生をして、その向う道を誤まることなからしめた教育家としての才腕は高く評価されてよいであろう。

更に忘れてはならぬことは、同教授が、ハーバード大学と提携してビジネス・スクールを建設し、わが国における経営者再教育の事に先鞭をつけられたことである。更に奥井教授の活動は、国民生活研究所や通信教育等の多岐に亘って目覚しいものがあった。

教授の逝去は、学界、教育界にわたり、ひとり本塾の取返し難い損失であるばかりでなく、我が国にとっても一大不幸であろう。

目を閉じれば教授の温顔髣髴として、未だに教授の他界を信ずることが出来ぬ。

御冥福を祈る。

学を楽しんだ人

寺尾琢磨

奥井さんといえば、いうまでもなくわが国における都市論の草分けであり権威であるが、最初のころはラスキンやモリスの芸術的社会理論に心酔していた。彼が都市論の講義を開始したのは昭和二年、経済学部にはじめて都市経済論なる講座が設けられたときで、それも当時の学部長堀江帰一先生の命令によったものらしい。とはいえ彼が助手時代すでに都市論に関心をもっていたことは、大正十二年、当時まだ助手だった野村さんが留学生として渡欧するときの告別講演会で、彼が前座として「城壁を囲らした都市」と題する講演を試みたことでわかる。それは、ヨーロッパ中世都市に関する考察だったが、しかし都市を論ずといっても、今日の都市論とはほど遠い懐古的・美学的、すなわち矢張りラスキン張りの内容だったと記憶する。もっともこうした傾向は、のちのいわゆる奥井都市論の特徴たるばかりでなく、奥井さん自身の一生を貫く特徴でもあったのである。ちなみにそのときの野村さんの演題は「経済学の Leitende Idee（指導理念）」という大きなもので、むずかしい哲学論をぶったのち曰く「それが何であるか、わたしには判らない。判らないからヨーロッパまでゆくのであって、判っていればゆく必要もあるまい」と。われわれ一同、狐につままれた気もちで退散したものである。

奥井都市論については、専門外のわたしの云々すべきものではないが、昭和十五年の大著「現代大都市論」は――これは